

## 子育て意識の形成と知識の取得に関する研究

武田京子\*1, 晴山幸恵

(岩手大学教育学部)

The Process of Making Maternal Consciousness  
and Getting Knowledge of Child Care

Kyoko TAKEDA and Yukie HAREYAMA

Faculty of Education, Iwate University

## 1. 目的

社会状況のさまざまな変化に伴い、核家族化・小家族化が進行し、家庭内の日常生活自体が大きく変化し、子どもの心身の発達に歪みが生じていることが指摘され<sup>1)</sup>、乳幼児を取り巻く生活を見直す必要が考えられる。「チャイルドマザー」<sup>注1)</sup>に総称される、精神的に未熟なまま親役割を取る母親が存在する一方で、信頼できる相談相手なしに育児情報に振り回され、育児不安を感じながら子育てを行っている母親もいる<sup>2)</sup>。現在は、社会全体の少子化や「ふたりきょうだいの定着<sup>3)</sup>」による家庭内でのきょうだいの接触経験の不足など日常生活の中で子どもの発達過程や大人の働きかけを学習し、無意識のうちに親としての準備教育を受ける機会が消失している。そこで、意図的・計画的な親になる心がまえの育成と子育てに必要な知識の取得を確実なものにすることが、必要になってきている。

学校教育において次世代をになう準備教育として位置づくのは、家庭科の「保育」の学習である。中学校では幼児、高等学校では乳幼児を対象とした学習が行われている。しかし、学習の時期の問題や時間数の面から、意識形成や知識取得の役割を十分に果たしているとはいえない。一部の高等学校では選択教科として「保育」を開講し、より深く学習することは可能だが、履修者は高校生全体を見てもごく

一部に過ぎない。そこで、本論では、子育ての基本となる意識の形成と知識の取得状況について、高校生から末子が小学生の親を対象として、子育て意識の形成と知識の取得の現状把握と家庭科における保育教育との関連について考察を試みた。

## 2. 方法

## (1) 調査目的

子育て意識の形成時期・過程、子育て知識の取得方法、子育て知識の内容について、世代差に着目して比較考察を行うために質問紙調査を行った。

## (2) 調査対象及び調査時期

世代差・個人の置かれている状況等の関連を分析するために調査対象は高校生・大学生、子どものいない社会人(「子無社会人」)、初妊婦、子育て中、子育て終了(「手離れ期」)の女性とした。対象者の内訳は表1の通りである。調査時期は平成13年9月から11月である。

	配布数	有効数	有効率(%)	
学 生	高校1年生	77	77	100
	高校3年生	85	85	100
	大学生	100	63	63
社 会 人	子どもなし	64	49	76.5
	初妊婦	98	98	100
	子育て中	134	134	100
	手離れ期	95	95	100

表1: 調査対象

(受付2002年3月19日/審査終了2002年4月5日)

\*1 〒020-8550 盛岡市上田3-18-33

高校生は、岩手県内の実業高校に学ぶ1年生と3年生である。1年生は「保育」を学習していないため保育未習者、3年生は選択保育を学習しているので保育既習者として分類した。大学生は、岩手大学教育学部の学生である。ほとんどが家政一般を学習しているので、家政一般履修者とした。子どものいない社会人と初妊婦の世代は同一である。しかし、子育てを現実的にとらえていないものと数ヵ月後に控えているものとは、意識の面で大きな違いがあると考え区別した。社会人については個別に調査票を配布し、記入後回収した。初妊婦については、盛岡市保健センターで開講している母親学級の受講者の協力を得た。乳幼児のいる子育て中の母親は、岩手大学教育学部附属幼稚園未就園児クラス、市内保育所、育児サークルの協力を得た。子育て終了(手離れ期)は末子が小学生の母親とし、盛岡市立飯岡小学校の協力を得た。を子育てから手を引きつつあるグループとした。この7グループ間の意識及び知識に差や変化が見られるかを考察した。

なお、大学生と社会人には調査用紙を男性にも配布したため、回収後、有効数から除外した。

### (3)調査項目

- i 理想の子ども数と実際(予定)の子ども数
- ii 子どもを持つ理由(積極的・消極的・予定外)
- iii 子育て意識(充実・楽しいがづらいときも・づらい・時には止めたい)
- iv 育児不安(とても・多少・あまり無い・全く無い・予測できない)
- v 育児知識の取得方法(学校・育児書・育児雑誌・母親学級・母親姉妹友人・育児サークル・テレビ・インターネット)
- vi 学校教育における育児知識の取得(経験の有無と内容, 意義)
- vii 幼児虐待<sup>注2)</sup>に対する意識(悪い・同情する・自分もなりそうで不安・共感・興味なし)
- viii 子育て評価と周囲の状況(夫や家族の協力・経済状態・満足感・子どものかわいさ・時期など)との関連(子育て中・手離れ期)

## 3. 結果及び考察

### 3.1 子どもの人数と生む理由

各年代とも、可能ならば産みたい数(理想)が実際に産む数(予定)を上回っており、「子どもを産みたい

が産みにくい」状況が存在している。一人っ子を希望は少なく、「子どもは持つならふたり」が定着している。

子どもをもつ理由は、「a・子どもを産むのは当然」「b・経済的にゆとりができれば」「c・次世代になう」「d・家の後継ぎ」「e・夫婦の絆」「f・周囲の期待」「g・生きがい」「h・子どもが好き」「i・自分の成長」「j・夢を託す」「k・生活が明るくなる」「l・老後のため」「m・予定外の妊娠」の13項目から3つ選択させた。全ての世代に共通して、「生活が明るく楽くなる」が、上位2位の中に入っている。学生グループは「子どもが好き」、社会人では、子どものいない社会人と初妊婦では、「夫婦の絆を深める」、子育て中と手離れ期になると「結婚したら子どもを生むのが当然」が加わる。世代が上がるに連れて漠然としたとらえ方から、夫婦の絆などより具体的、現実的な理由付けがされている。

しかし、初妊婦については一番子育てについての期待が高いと予測していたが、希望する子ども数も少なく、子どもを生む理由も「予定外に妊娠」の割合が一番高いグループであった。子育てが現実のものになるまでは、理想像を描き好意的に考えているが、実際は「予定外の妊娠」によって子育てが始まる。大学生13.3%、子無し社会人8.2%が「経済的にゆとりができれば」、を選択するのに対し、初妊婦以降の世代は1%にも満たない。妊娠・出産は計画通りには行かないものだが、予定外の妊娠はそれまでの想像していたことが急激に現実として突きつけられることを意味している。生まれてくる子どもに対する夢や期待よりも、直面する問題への対応に追われ、ゆとりを失うことになる。

選択肢a～fを消極的理由、g～lを積極的理由としてまとめたものが図1である。現実には子どもが生

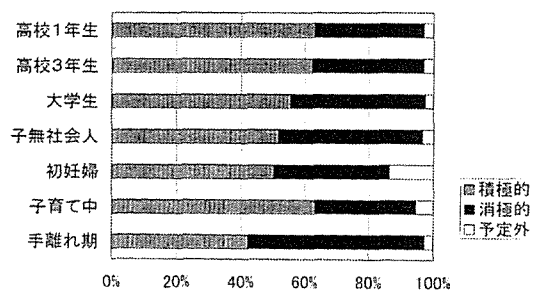


図1 子どもをもつ理由

生まれるまでは世代が上がるに連れて、積極的理由が減少する。初妊婦の場合は、未知の事柄に対する不安があり、積極的に受け止められないと考えられる。子育て期になり、実際に自分の子が誕生し日常的な世話などが生活に加わると、具体的な対象に対する積極的なとらえ方に変化する。さらに、手離れ期になると、子どもが成長する過程での様々の事象に対する反省や評価が加わり、客観的な子どもとの距離感のある考え方をするようになる。

### 3.2 子育てに対する意識

初妊婦までの世代には、子育てを予測して、それ以降の世代には現実生活の感想を選択させた(図2)。

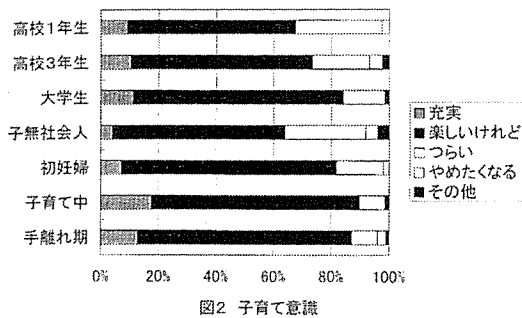


図2 子育て意識

全ての世代に共通するのは、「楽しいけれどつらいときもある(と思う)」という現実的な見方である。育児をまだ経験していない世代が、育児に対して否定的な、「予想しているよりもつらいと思う」「つらくて子育てをやめたいと思う」が肯定的な「とても楽しく充実すると思う」を上回っている。否定的な意見が最も高いのは、子どものいない社会人である。結婚や出産を年齢的に意識し始めると、今まで経験したことのない子育て不安を感じ、避けてしまいたいと思う。しかし、自分の子どもが誕生し、実際に子育てを行ってみると不安は解消し、子育てを楽しいものとして受け入れられるようになる。子育て中の世代は、日々成長していくわが子の様子を見ることによって、楽しさがつらさを和らげてくれている。また、「やめたくなくなるときがある」を選択したものはいない。実際にそう思うことはあっても、親としての責任感が生まれた結果であろう、子育てを経験することで親として成長した結果が現れている。

### 3.3 育児不安と育児知識の取得方法

子育てに関する不安は、各世代に存在している。初妊婦以前の未経験の事柄に対する不安だけでなく、子どもが生まれた後も、それぞれの段階に特有の不安が生ずる。そこで、「育児不安は育児知識が豊富にあれば解消するか」とあわせて検討した。

世代別の育児不安の実態を図3に示した。手離れ

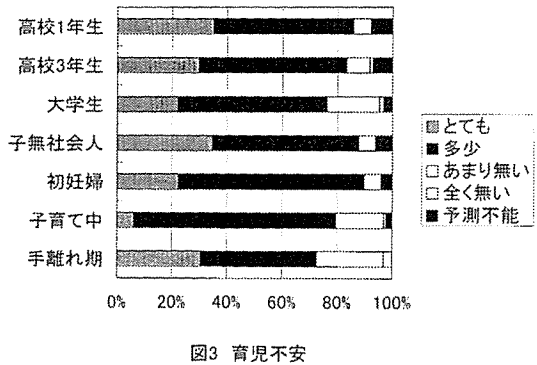


図3 育児不安

期の母親は、高校1年生、3年生、初妊婦との間に0.5%水準の有意差で育児不安が少ないという結果が得られた

育児知識の取得方法は図4に示した。世代によ

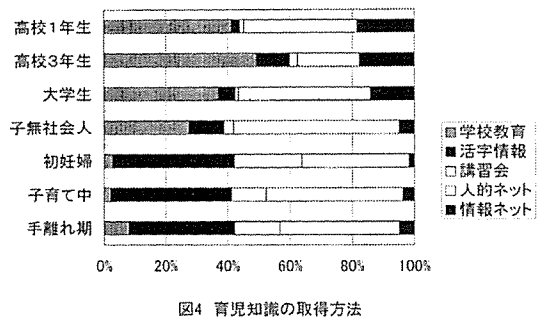


図4 育児知識の取得方法

て取得方法は異なっている。子育てを意識するまでは、学校教育が多いが、初妊婦以降の育児に直面しているもので学校教育を選択したものは非常に少ない。出産適齢期に近づくにつれ、「育児書・育児雑誌」の活字情報と「母親・姉妹・友人など育児経験のあるひと」などの人的ネットワークから取得するようになる。初妊婦以降は、さらに、「産婦人科や地域で行われる講習会・母親学級」の比率が高まる。

子育て中, 手離れ期の育児知識の取得方法は, 学校教育ではなく, 身近な「母親・姉妹・友人」である。学校教育で得られた育児知識は, 一般的な知識であって, 実際の子育てに有効ではないことがわかる。育児不安の解消には, 個人差に対応した, 子育て中に生ずる様々の疑問に対するこまやかなアドバイスが役立つと考えられる。手離れ期の母親が子育てに不安を感じなくなっているのは, 実際に試行錯誤しながら子育てに直面し, 疑問が生じたときには母親・姉妹・友人などの経験者の話を聞いて自分自身の経験知として蓄積していった結果と考えられる。

### 3.4 学校教育における学習経験

中学校・高等学校における学習項目を上げ, 記憶の有無を確認した(図5-1,2)。選択「保育」学習直

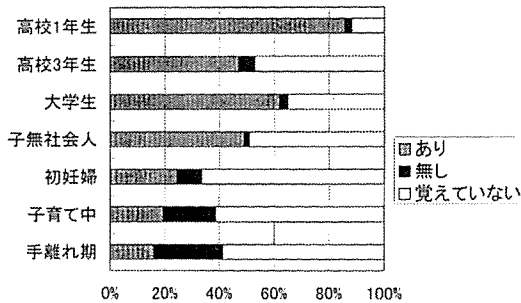


図5-1 学習経験(中学校)

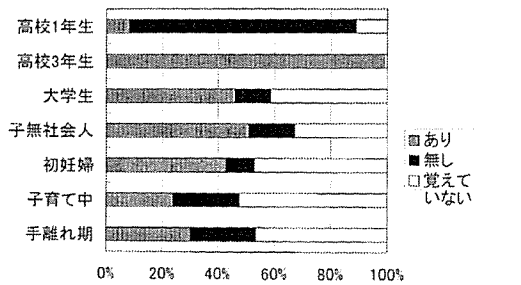


図5-2 学習経験(高校)

後の高校3年生が高率を示すように, 中・高校ともに学習した直後はよく記憶しているが, 時間が経過するにつれて印象の薄いものになっていることがわかる。学校教育における保育学習の意義は, 学習した直後は「将来の育児に役立つ」と考える割合が多

いが, 年齢が上がるにつれて, 役に立つと考える割合は減少する(図6)。

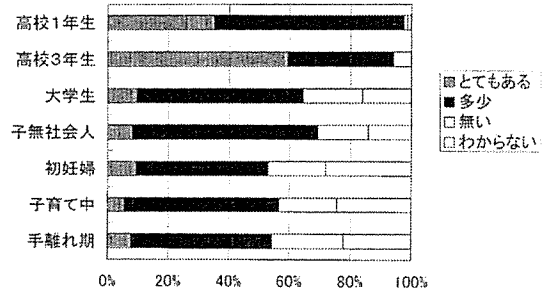


図6 保育学習の意義

学習内容については, 中学校では高い順に「幼児の身体の成長」(64.2%), 「幼児の遊び」(44.0%), 「幼児の心の発達」(42.9%), 高校では「生命の誕生」「新生児の特徴」(46.3%), 「母性の保健・保護」(44.9%), 「乳幼児の発達」(43.6%), 「結婚と育児」(40.8%)である。

学習した直後は, 新鮮な内容であって印象に残っているが, 実際に活用する機会が無いと記憶は風化する。実際の出産までにすくなくとも10年間の空白があれば, 学習した内容が当てはまるかどうか疑問に思うのもっともなことである。実際の子育て中, 手離れ期の母親たちには, 学校教育における保育教育は, 知識取得の方法としても, 内容にしても, 効果があるとは受け取られていない。

### 3.5 幼児虐待について

親役割を客観的に把握できるか検討するために, 幼児虐待についての認識を問うた。幼児虐待について, 「悪い(信じられない)」「多少同情する」「自分もなりそうで不安」「親の気持ちに共感する」の選択肢から選ばせた(図7)。学生(高1・70.9%, 高3・74.4%, 大学生・67.2%)及び子無しの社会人(70.0%), 手離れ期の親(63.3%)は幼児虐待を「悪い」として考えている。しかし, 子育て中の親は, 悪い事としてとらえている割合は43.7%と下がり, 「多少同情する」を選択するものが35.9%へと増加し, 「共感」が増加している。不安要素の多い初妊婦は, 幼児虐待についても「自分もなりそうで不安」選択する率が高い。

子育て中は, 直面する様々なことへの対応に追われ。親としての立場を見失う危険状態に置かれてい

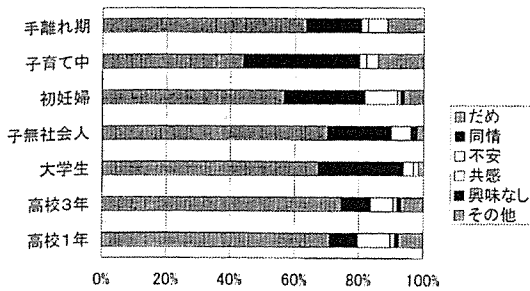


図7 幼児虐待について

る。自由記入欄の「そうしなければならなかった気持ちも多少わかる。ただその一線を越えないかどうかの違いだと思う。」「そうなりそうなきももあるかもしれない。ふと我に帰れるかどうかによるのだと思う。」などの記述から、感情を抑えることのできる子育て意識の形成ができてきているかどうか、虐待の歯止めになっていると考えられる。また、「どこまでがしつけなのか良くわからない。行き過ぎたしつけは虐待だが、判断に苦しむことがある。」という記述があった。子育て中の親は「きちんと育てなければならない」と考えている。しかし、自分の育て方でよいのかどうか判断に苦しみ、親の責任範囲内の善悪基準ができていないことが、不安やストレスの原因になっている、と考えられる。

「夫や周りの人々の、育児へのかかわりのあるなしで、違ってくと思う」という記述からは、実質的なサポートはもちろん有効であるが、何かあったときに相談できる人がいるなど、母親の孤立感や子育てへの重責感を軽減するような精神的なサポートが、幼児虐待防止の有効な対策になると考えられる。

### 3.6 子育て評価と周囲の状況

子育て中と手離れ期の母親に、子どもを産んだことに対する評価と母親を取り巻く状況を問うた(図8, 図9-1,2)。「子どもを産んでよかった。後悔は全くしていない」と回答したのは、子育て中86.5%, 手離れ期82.1%である。ほとんどの母親が「子どもを産んでよかった」と評価している。周囲の状況は夫や家族の協力があがり、子育てが楽しく、母親であることに幸せを感じ、子どもをかわいと感じている。しかし、「子どもを産んでよかったが、たまに後悔をすることがある」と回答したものは、子育て中

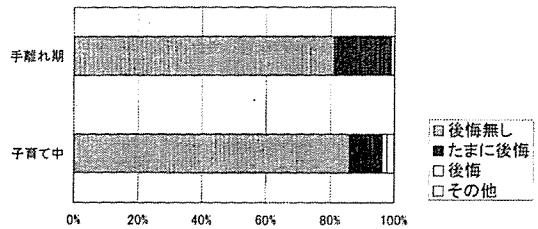


図8 子育てについての評価

10.5%, 手離れ期16.8%であった。周囲の状況は夫の協力が無い、経済的に大変、子育てが辛い、と感じ、理想と現実が違っていると感じている。子育て中の「経済面」「1人になれる」「理想と現実のずれ」の項目に「後悔なし」と「時に後悔」の間で有意差があった。経済的に余裕があれば家事サービスを外部に頼ることは可能である。夫や家族に子どもの世話を任せ、一人になる時間があれば、精神的なリフレッシュが可能になる。気持ちにゆとりが生まれれば、予想していないことが起こっても見方を変えることもでき、理想と現実のずれに対しての耐性も生まれてくる。また、子どもを産んだことに全く後悔していない母親も、手離れ期になると時には1人の時間がほしいと感じるようになる。子育て中、手離れ期ともに、気持ちにゆとりを持って子育てができるかどうかは、経済面や夫や家族の協力や理解のあるなしが大きく影響していることがわかる。

### 4. 結論

子育て意識の形成過程と知識の取得方法の問題点を明らかにし、少子化社会の育児機能を健全に維持発展させる方向を模索した。

現代社会の育児機能の問題点は、子育て意識の形成不全、育児知識の不足による育児能力不全と、知識はあるが周囲の状況によって十分に発揮できない場合があることが、多方面から指摘されている。

調査結果から、実際に育児に直面するまでとそれ以前では育児知識の取得方法が異なっていることがわかった。学校教育で学ぶ育児知識は、一般的なもので必要なことは網羅されている。高等学校教諭からの「育児書などより高等学校・保育の教科書がポイントをきちんと押さえていてわかりやすかった。」というコメントからも必要十分な知識教育が可能であることがわかる。しかし、学習した後に10年以上

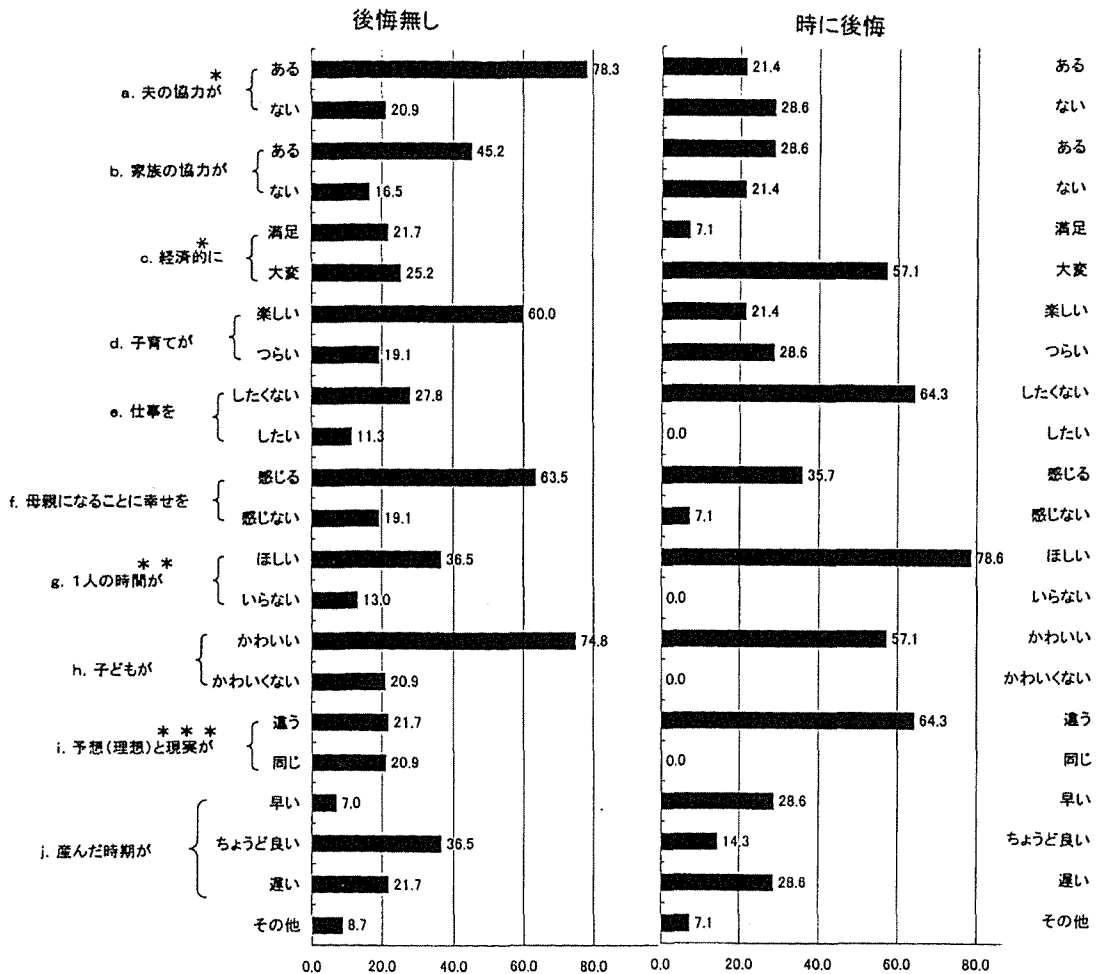


図9-1 周囲の状況 子育て中

\* 0.05>p≥0.01  
 \*\* 0.01>p≥0.005  
 \*\*\* 0.005>p

経過すると、記憶も薄れ、内容を古いものではないかと感じてしまうのも仕方のないことである。学びたいという意欲や、動機が明確なときに学習するのが効果的であることは、育児知識の面でも当てはまるのか検討が必要である。

しかし、「学校教育の中で子育てに関することを扱わなくてよい」という意味ではない。これからは子育て意識の形成に重点をおくべきではないだろうか。子どもを産み育てることの意味を個人・家族・社会の問題として考えさせ、個人を尊重した人生設計の中で協力して家庭建設や子育てにあたる

ことを学習することによって、男女共同参画型社会における子育て意識の形成が有効に行われるのではないだろうか。

今回の調査で、「社会から取り残されている」という理由から、子どもを産んだことを後悔する母親はごく少数であった。しかし、「1人の時間がほしい」という理由から後悔している母親は多かった。母親は「社会に出たい」のではなく「子育てばかりに縛られていたくない」のである。その要因は、「育児に関して夫の協力が」「家族の協力が」「経済的に大変」など母親周囲の状況に関する項目に限られ、「子どもが

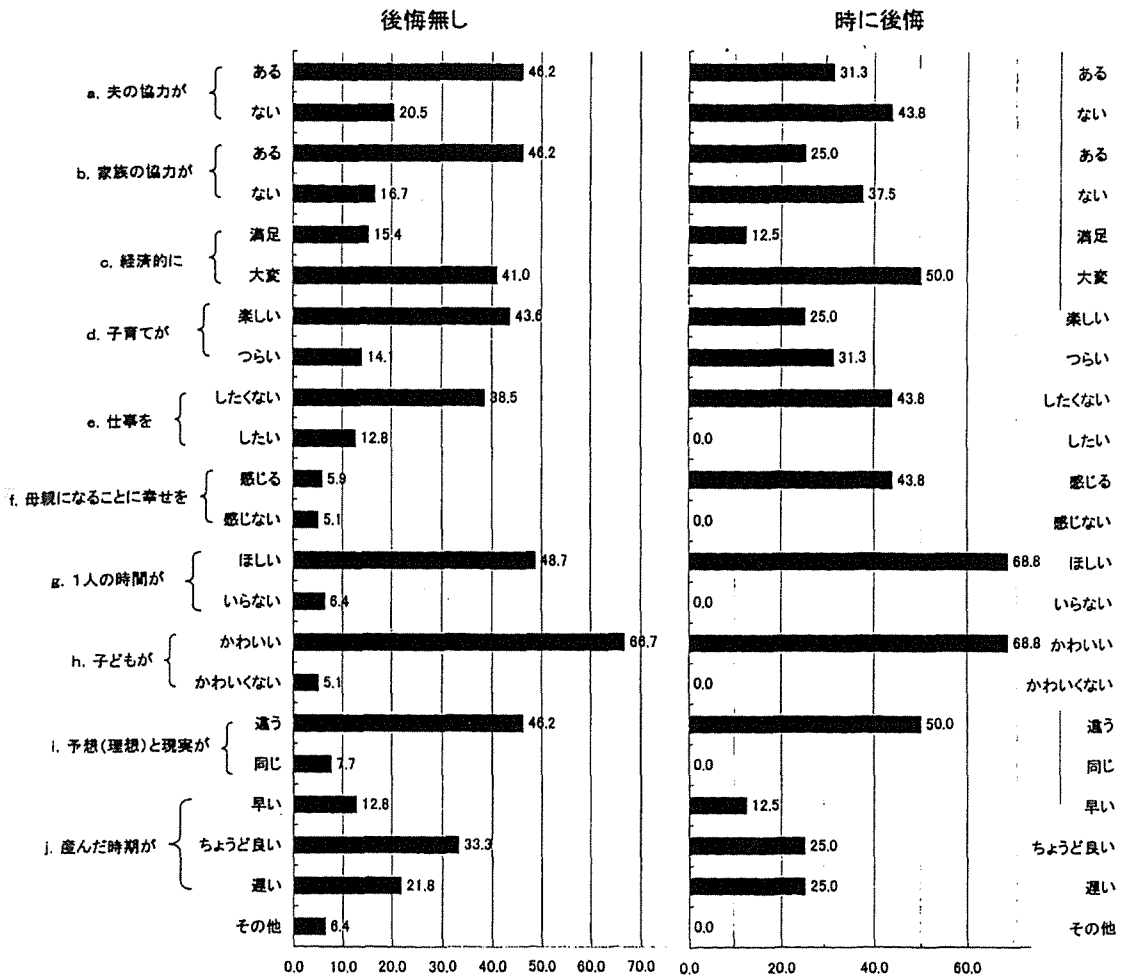


図9-2 周囲の状況 手離れ期

わいくない」「母親であることに幸せを感じない」というような子どもに原因がある項目は選択されていない。母親に後悔を感じさせているのは子ども自体ではなく、周囲の環境である。母親の子育て意識、つまり「母性」は、女性に生まれつき備わっているものではなく、成人し親役割を取得していく過程で形成されていくものである。

また、核家族時代の子育ては、母親だけの仕事であると言い切れなくなっている。出産は女性の役割であるが、誕生後の養育の責任は両親にあることを明確にし、協力体制を作ることが大切である。多様

な生き方が可能な現代社会の中で、孤立して子育てをしていると、時には母親役割から開放されたいと思うようになる。そんな時子育てに関する疑問が生じたときに、同じ状況にある友人や、アドバイスをしてくれる先輩がいると、育児疑問は育児不安へ移行せずに、健全な母親役割の取得が可能になる。

これからの家庭科教育では、人生設計や家庭建設のプロセスの中で子どもを産み育てることの意味を明確にすることが重要になってくるだろう。実際に子どもを産むか産まないかに左右されるのではなく、次世代育成能力の育成に重点を置くことによ

て、女子に限らない教育内容も可能になる。教育の適時性を考慮すると、育児技術の学習は、初妊婦に対する母親学級が有効であり、両親学級や父親学級の充実を図り、子育てを両親で行うものとしていくのが望ましい。

なお、本論は平成12年度教育改善推進費(学長裁量経費)研究教育プロジェクト経費、「乳幼児の生活文化に関する研究」の一環として行ったものである。

#### 注

注1) AC公共広告機構のCMコピー『近頃チャイルドマザーが増えています。産んだだけでは親にはなれません。』(2001年9月)から一般化した。精神的に未成熟なままで子どもを

産んでも良いのか、という問いかけをし、論議を呼んだ。

注2) 学術用語としては「児童虐待」にあたるが、新聞等で「幼児虐待」という表記を用いることも多く、調査にあたってより身近な言葉として「幼児虐待」を用いた。1～6歳までの狭義の幼児だけではなく、乳児・学童を含めた子どもに対する虐待を示す。

#### 参考文献

- 1) 中央教育審議会. 少子化と教育について. 2000
- 2) 大日向雅美. 子育てと出会うとき. 東京, 日本放送出版協会, 1999
- 3) 落合恵美子. 21世紀家族へ. 東京, 有斐閣, 1994